



すね神さん

宇老瀬坂の上の東の端に、足の痛みに霊験あらたかな神様がおまつりしてあるというので、牛牧の古小路重雄さんに案内していただいております。神社は青木地区中原の五十坂を登りきったところから、北へ約500メートル（老瀬坂上から東へ600メートル）のところにあります。

おまいりした時は、境内がきれいに掃除されて、お供えの榊、ローソク、お菓子などが上がっていましたが、この神様には次のようないい伝えが残されています。

ずっとずっと大昔のことです。西白杵の高千穂に住んでおられた神武天皇は、高鍋地方によくお出でになりました。ある時のこと天皇は、母君の須峯さま（※1）をお連れになって山王（羽根田）にお出かけになりました。ところが途中（すね神さんのある所）までお出でになった時、母君の足が急に痛み出し、ついに一歩も前に進むことができなくなりました。

天皇は大変お困りになりましたが、当座の手当てをされて、母君をその場に残して出かけられました。母君の須峯さまは何とかして痛む足をなおそうと、その場で懸命にお祈りをなさいました。ところが不思議なことに、あれほど痛んでいた足がなおり歩けるようになられたのです。

母君の須峯さまは大変およろこびになられて、その場から引き返されたということです。

この話を聞いた村人たちは、その場所にはきつと足の神様がいらっしやるのだという評判になり、粗末になってはいけないうち、お宮をお造りしてまつりました。そして須彌原神社と命名しました。

そのうち、村の人々はすね神さん、すね神さんと親しみ

※1 神武天皇の母として史に記されている玉依姫（タマヨリヒメ）を指していると思われます。



あがめてきました。

その後すね神さまは、牛牧の人々を中心として、近郷近在の人々の信仰する神さまとして親しまれてきました。

人々は足が痛み出すと、このすね神さんにおまいりしてお祈りしましたが、お祈りすると不思議にも痛みがとれるのです。

そうしたことが続いていくうちに、ますますすね神さまを信仰する人々が増えてきました。とくに町の方からもたくさんの方々がおまいりに見えていました。

今でも、毎月12日になると、牛牧地区のお年寄りの方々がお供えものを持っておまいりされまし、近郷からおまいりが絶えません(※2)。

※2 現在、須彌原神社は所在不明。

昭和63年1月発行 (採話…中尾地区 岩切久江 たかなべむかしばなし第2集)



すね神さん MAP

しよぜぐすり (せんじ薬)

「来たわいな。来た

わいな。来たという

でもお客じゃござら

ん。飛脚じゃござん

せん。河辺家伝来の

しよぜぐすり。さても、しよ

ぜぐすりの効能は、打ち傷、やけど、水虫、肥まけ、

ひび、あかぎれに至るまで、油にとかして急所

につくれば、痛むことなくたちまち治る。さあ

さあお買いなされ。一包わずかに一銭五厘、一

銭五厘(※1)と、うたいながら薬売りは田舎

を歩きまわっていた。

もとから、この辺りは皆農業で日中はほとん

ど野良仕事に行つて留守の家が多かった。

ある日のことである。薬売りが例の如くうた

いながらある厩をのぞいて見るとハミ桶(※2)

が空っぽだ。そこでハミ桶一杯ハミを切つてお

いた。

このことを知らない農家の人は、今からハミを切つて馬を飼わねばならんと厩に馬を引き入れようとしてびつくり仰天した。ハミ桶には一



杯ハミが切つてあるではないか。

農家の人は目をパチクリさせるばかりであった。

ちようどこのとき薬売りがやつて来た。

「なかなかお働きなさるな!!失礼だとは思いま

したが、ハミがないので少しばかり切つておきま

した」

「さては、あなたがはみ切つてくださったのか。

やれやれありがたいことだ。実は不思議に思っ

ていたところです。本当にありがとうございま

した。さあ何もありませんが一献差し上げます

からどうぞお上がりください」

というわけで、薬売りは家にあげられて焼酎の

振る舞いとご馳走になった。

そのうえ薬まで買つてくれ、近所にも吹聴し

てもらった。これが縁となつて折々に廻つてい

くようになった。その薬は効能以上に効くと評

判が甚だよろしく、皆、彼の来るのを待つよう

になったという。

(採話…菘江地区 手塚隆吉) 平成3年3月発行たかなべむかしばなし第3集



※1 このむかしばなしの年代はわからないが、昭和初期ごろと仮定すると現在の60円程度と推測されます。
※2 牛や馬などの飼料をいれる容器、桶。

